

寝取られの館

美母娘の誘惑



沢見独去

獨去書房

目次

序章

第一章

新居での生活

1

.....

11

2

.....

25

3

.....

44

第二章

女たちの秘め事

1

.....

63

2

.....

80

3

.....

100

第三章

堕ちていく私

1

.....

123

2

.....

128

3

.....

149

4

.....

171

第四章 淫らな母と娘

1

.....

191

2

.....

208

3

.....

226

第五章 さらなる墮落

1

.....

248

2

.....

270

第六章 享樂の果てに

1

.....

292

2

.....

311

3

.....

335

終章

寝取られの館―美母娘の誘惑

序章

豪華で古風な洋館の二階の一室。

照明もつけず薄暗い部屋の中で、キングサイズのベッドが、白いシーツで皺ひとつなくメイクされていた。

その隣にはロココ調の三人掛けのソファ。座面と背もたれには、緋色のベルベットが張られている。そこに濃い色のスーツを着た男が座り、横を向いて、格子窓から外を見ている。

男の大きく開いた股のあいだには、女がひざまずいている。

薔薇色のドレスを身にまとった女性だ。太ももの半ばまでずり上がったスカートの裾から、漆黒のストッキングにつつまれた形のいい脚が出ている。引き締まった完璧な形のふくらはぎ。その足元にはダークレッドのピンヒール。

男の股間からは、硬くそびえ立ったペニスが突き出ている。

それをドレスの女は、真っ赤なルージュを塗った唇を大きく丸く開いて深く啜えこんだ。赤黒くごつごつした硬竿が、赤く濡れた唇に吸いこまれるように消えていく。妖艶な色気に溢れた整った小さな顔。少し垂れた大きな目は、奉仕の悦びで濡れている。その潤んだ瞳で椅子に座った男の顔をじっと見上げながら、いきなり彼女は頭を激しく振った。

赤い唇が肉胴の形にそって尖る。

——じゅぼ、じゅぶっ……ちゅぼ、じゅぱっ……。

湿ったリズミカルな音が、高い天井の洋室に響いていく。

ドレスの大きく開いた襟元から深い谷間が見えている。その奥でやわらかそうな乳肉が、たっぷりとたゆたっている。

彼女は、竿の根元に指を巻きつけてしごきながら、大きく舌を出して、亀頭を舐めまわす。

真っ赤なマニキュアが塗られた尖った爪。その左手の薬指には、シンプルな白金のマリッジリングが光る。ドレスに包まれた引き締まった腰が妖艶にくねり、美貌が紅潮していく。

男は顔を横向けて、窓の外を見つめ続けていた。



鬱蒼とした印象さえある前庭の向こうに、凝った意匠の鉄製の門がそびえている。その前の二車線の道路を隔てた向かいには、洋館とは不釣りあいな今時の建て売り住宅が並んでいる。

その細長い住宅のひとつに、トラックが駐車していた。引越し業者にできればきと指示をする若い女性が見える。

「ほお」

男はその女性を、淫蕩な目つきで見つめる。

股のあいだにひざまずいて激しく口腔性交を続けるドレスの女に、一瞥をくれた。

「なかなかいい女だ。次のターゲットは、彼女がいいんじゃないか……」

両手で妖しく男のペニスをしごき上げながら、彼女はとろけたように微笑む。

「わかりました……あなた」

「うん」

男が満足げに頷くのを見て、再び亀頭全体をつつみこむように口に含んだ。そのまま頬がこけるほど強く男のものを吸う。同時に根元に巻きつけた指で、激しく肉棒をしごいていく。

彼はわずかに顔をしかめて、快楽を表情にあらわした。

「もういい。入れてくれ」

「はい。あなた……」

女は立ち上がり、彼に背を向ける。そしてそのまま両手でゆっくりとドレープの入ったスカートをまくり上げていく。

裾の下から、黒のレースのガーターベルトがストッキングを吊っているのが見えてくる。

さらにスカートが上がると、その奥に真っ白な桃のような臀部があらわになった。

下着はつけていない。

ほどよく肉のついた魅力的な美尻の奥には、サーモンピンクの女の秘貝が、すでにたつぷりと濡れて光っている。

そのまま彼女は顔だけを振り向かせ、尻を誘うように淫らに振りながら、そこを男に見せつけるように近づいていく。そして、きつくそびえ立つ肉棒めがけて、みずから腰を落としていく。

男の赤黒い剛直が、真っ白な尻の中に突き刺さる。

ドレスを身にまとった肢体をくねらせて、女は嬌声を上げた。

「はあああぁんっ……いいっ……」

ストッキングにつつまれた美脚を、大きく開いた。そのまま中腰になってみずからいやらしく腰を振り、ペニスを肉壺でしごいていく。

男がその柳腰を両手でつかみ、下から腰を突き上げ始める。

たっぷりとした豊乳が、重そうにドレスの下で揺れ、今にもこぼれ落ちそうだ。

「あんっ。あはあああっーんっ！　いいっ」

女の甘い声が、薄暗い洋館に響きわたる。

男はいまだじつと横を向いて、窓から外の様子を見下ろしている。

第一章 新居での生活

1

「おい。この段ボール、どこ入れたらいい？」

新井孝典は、妻の果穂に聞いた。

肩までのストレートの黒髪をバレッタでまとめ、白のTシャツに七分丈のスリムジーンズを身にまとった彼女は、額に汗を浮かべながら微笑んだ。

「えーと、それは……寝室へ運んで」

さわやかな三月始めの午後の日差しが降り注いでいる。

孝典はうなずき、両手で箱を持った。

なにが入っているのか、結構重い。



うんうんうなりながらそれを運ぶ孝典を見て、果穂は笑った。

「腰を痛めたら、仕事に差し障るわよ。業者さんがいるんだから、無理しないでね」
「あ、ああ。でもなんか体を動かしてないと、落ち着かないんだ」

荷物を両手でかかえて、彼は新居へと入っていった。

二人が結婚して一年。

ようやく探していた家が見つかり、賃貸マンションから引越すことができた。

貯金を頭金にし、三十五年ローンを組んで買った夫婦の愛の巣だ。

孝典は二十九歳。大手の住宅設備メーカーの営業マンをしている。高校・大学とラグビーのバックスで鍛えられた体は、背が高く、細身だが筋肉質だ。

妻の果穂は二十五歳。三年前に新卒で孝典の会社に入り、近くの部署に配属された。一日見て好意を抱いた彼の熱烈なアタックが実って、すぐに交際するようになり、つきあって二年で結婚した。

派手なところのない清楚な感じの美人で、それは彼女の性格も同様だった。体型は細身だが出るところは出ていて、男には魅力的だ。

孝典は幸せだった。美しい妻に、マイホーム。忙しいが、やりがいのある仕事。これ以上、なにを望むことがあるだろうか。

ようやく荷物の運び入れが終わった時には、もう暗くなっていた。

段ボールの箱が、あちこちに積み上がっている。なんとか寝具と食器類を取り出し、寝ることと食べることだけはできるようになった。

狭い土地に建つ細長い三階の家だった。同じような意匠の家が十数軒並んでいる一角。一階には駐車場とささやかな庭、玄関を入ると六畳の和室とバスルームがあった。

夫婦は二階のリビング・ダイニングのソファに並んで座っていた。低いリビングボードは運んできていたが、テレビはまだない。ベランダに面した大きな掃き出し窓からは、道を隔てた向かいの古びた洋館の高い塀と、その奥に広がる庭が見える。大きな木々が闇に黒々と蠢いている。

最初にこの館を見た時には、びつくりしたものだ。よく戦火を逃れてこんな建物が残っていたものだと感心した。外からは明治時代の形式を踏襲しているように思える。すでに白大理石と焼成煉瓦の外壁はくすんでいるが、それでも堂々とした威風を失わない。

窓からそんなレトロな洋館が眺められることも、この家を選んだ理由のひとつだった。

二人は揃ってそんな景色を眺めた。

「ごくろうさま。残りは明日にしましょう」

果穂がにこやかに言う。

孝典は頷いて、妻に提案する。

「おつかれ。もう腹がぺこぺこだよ。今日は果穂もよく働いたし、どこか外でメシ食べようか」

「うーん……」

彼女は思案顔になる。

「ほんと節約しないといけないけど……まあ、今日はいいか。引越祝いだしね」

「よし。じゃあ駅前にあったビストロに、行ってみる？　そんなに高そうじゃなかったし」

「うん！」

果穂が笑顔でうなずいた。

二人は連れだって新居を出る。

駅前のレストランで食事をすませた夫婦は、店を出た。

グラスワインを何杯か飲んでほろ酔いになった二人は、手をつないでゆつくりと家への道を歩いている。

まだ肌寒い三月の夜風が、酔いのまわった頬に心地よかった。

「おいしかったね」

「ああ。安かったし。また使えるなあ」

孝典はいくらでも飲める口だったが、果穂は酒が弱い。ワインを二杯飲んだだけで、顔を赤くしている。その清楚な目をとろんとさせている表情は、知り合って三年以上経つ今でも、彼の胸を直撃するくらい色っぽかった。

洋館の前を通る。

高い塀が巡らされていて、その向こうに二階建ての白く四角い建物が黒々とそびえていた。

この敷地だけで、夫婦の家がいくつつ入るだろう。

「やっぱ、でかいよなあ」

「ほんと、どんな人が住んでるんだろうね」

初めて見た時から何度目かの、同じような感想と疑問を口にする。

正面の門は鉄製の堂々としたものだ。蔓草のような複雑な曲線を描く、太く黒い

ラインで構成されている。その向こうには木々に囲まれて石畳の道が延び、重厚なエントランスが鎮座していた。

二階の窓に灯りがつき、この古びた洋館にたしかに住人がいることを示していた。門を通り過ぎるとすぐに孝典たちの家の玄関だ。鍵を開けドアをあける。

「はあ。酔っぱらっちゃった」

果穂はそうつぶやく。

二人はそのまま三階の寝室へと、手をつないだまま入った。

ダブルベッドは家を購入した時、新調したものだ。以前のマンションでは、狭すぎてベッドは置けなかった。寝具はかろうじて段ボール箱の山から出してあった。

「まだ、落ち着かないね。明日から荷物の整理、がんばらなくっちゃ」

「明日も休みだからさ。俺も手伝うよ」

果穂はほろ酔いのとろりとした表情で微笑んだ。

「うんっ。お願いね」

そんな姿を見た瞬間、孝典はたまらない性欲を覚えてしまう。股間がむずむずとし、彼は妻の細い体を抱きしめる。

「あんっ」

小さく呟いて、彼女は夫の腕に身を任せた。

「果穂っ」

二人はキスを交わし、抱きあったままゆっくりとベッドへ倒れこんだ。

Tシャツの上から、ほどよい大きさに張り出した果穂の胸を揉む。そこは布を隔てていてもやわらかく、手のひらに吸いついてくるようだった。人差し指で乳首のあたりを円を描くように押してやると、小さな声であえいだ。

「ああっ……あなたっ」

二人は深く唇を重ね合い、肢体をもつれあわせながら、互いの衣服を剥ぎ取っていく。

生まれたままの姿になって、あらためて孝典は妻のふっくらと盛り上がった魅惑的な胸を揉み、その先に色づく桃色の蕾に口をつけた。マシユマロのようにやわらかな弾力のある乳肉が、手のひらの動きにあわせて変形し押し返してくる。小さな乳首が次第に立ち上がっていき、つんと飛び出す。

「あああんっっ……あはん」

控えめな悶え声を聞きながら、孝典は体をずらして妻の股間に顔を埋めた。

「あああっ……だめっ。汗かいてるから……あああん」

薄いめの菱形の恥毛。こんもりと盛り上がった土手を走る女裂が、その繁みの中
うっすらと見えるほどだ。その奥にはサーモンピンクの秘所が、密やかに息づいて
いた。

孝典は白い太ももを割って、顔をこじ入れる。

「ああんっ……シャワーも浴びてないのに……」

果穂が照れたようにささやく。細くくびれた腰がくねり、男の煩惱を刺激するメス
の匂いが漂ってくる。

彼は大きく舌を伸ばして、その裂け目にむしゃぶりついた。割れ目にそって舌を大
きく動かし、舐めとるように動かす。ぴくりと彼女の体が跳ね、小陰唇にはさまれた
膣口から酸っぱくぬるぬるした愛蜜が漏れ出してくる。

「やああんっ……だめっ……はうんっ……」

夢中で孝典は、妻の秘所を舌で愛撫していく。

もともと、果穂はセックスに貪欲なほうではない。つきあった時は処女ではなかつ
たが、激しくすると痛がった。股間を舐めるのも、最初は恥ずかしがってさせてくれ
なかつたほどだ。

舌先を尖らせて、その妻の膣穴に割り入っていく。めいっぱい舌を伸ばして奥まで

突っこみ、中をかき混ぜると、さらに奥から蜜が溢れてきて股を濡らした。

「やんっ……あなたっ、そんなにしたら、わたし、だめっ……はああああんっ」
果穂が少しずつ快感に囚われていく。

襪につつまれて存在する真珠に口を移す。つつくようにその肉芽を刺激すると、さらに腰が動いた。

「あああんっ……そこは、だめえっ……はあん……」

クリトリスを責めながら、孝典は腰を移動させて彼女の顔のほうに持っていく。つきあいだした頃は舐められるのも恥ずかしがったが、夫のものをフェラチオするのも、果穂は嫌がった。こちらも恥ずかしいのだそうだ。

拝み倒して口に含んでもらった。それからだいぶ慣れたようだが、それでも毎回はしてくれない。

今日はしてくれるだろうかと期待しながら、一物を顔の横に持っていく。口を陰核から離して、孝典はささやいた。

「果穂……俺のも、してくれる？」

「あんっ……」

彼女はそれには直接答えずに、すでに硬くそそり立った肉棒に指を巻きつけた。

横に向けた顔を近づけて、あくまで控えめに先端を咥える。

とたんにそこから鋭い快感が全身を突き抜ける。思わず腰をひくつかせながら、彼はクンニリングスを再開した。

薄暗い新居のダブルベッドの上で、二人は互いの性器に口をつけながら、快楽に身を任せていく。

汗が吹き出して、背中を伝う。

「んんんっ……あんっ……はむんんっ……」

口を肉茎で塞がれたくぐもった嬌声が、静かに響く。

果穂がゆつくりと、肉胴をしゃぶる。

頭が前後し、唇が側壁をこすり上げる。

妻はエクスタシーを迎えることに、消極的だった。快楽に支配され自分を失ってしまうことを怖れているように、孝典には感じられた。

今までつきあった女性は何人かいた。その彼女たちとは比較的激しく貪りあうセックスをしてきたつもりの孝典は、そんな妻を少し不満に思っていた。けしてそれを表には出さなかったが。そのうち開発されてもつと情熱的になるだろうと、楽観的に思っていた。

今回も、果穂はペニスから唇を離して、感じながらもそれ以上進むのを拒んだ。腰をずらして夫の口から逃れる。

「あああっ……あなた……これ以上したら……わたし、もう、だめ……ああんっ、もう入れて……」

彼はしかたなく体を入れ替え、彼女の股を割って腰を重ねた。

「来て……」

妻が脚を大きく開いて、孝典を受け入れる。

そそり立った桃色の乳首が、ぷるりと震える。

ゆっくりと腰を落としていく。何度も交情を重ねた妻の体だ。確認しなくてもずぶりと肉棒が蜜穴の中に収まっていく。

「んぐう……はあっ」

中は暖かく、ペニスを蠢く襞が締めつけてくる。それをかきわけるように、亀頭が奥まで進んでいく。

果穂が整った顔をゆがめて、苦悶に似た表情を浮かべた。頬を薔薇色に染め、開いた太ももで腰を挟みこんでくる。

そのまま腰を使いだす。

ぬるぬるした狭い穴に、リズムよく剛直を突きこんでいく。

「ああっ……はんっ……んああああっ」

妻の両手が、背中にまわる。

実際に挿入した時でも、あまり激しく奥まで突くと、彼女は痛がる。

孝典は慎重に腰を動かした。

他の男の一物と比べても、自分のものが大きいことは自覚していた。女性に大きいと喜ばれたこともあったが、妻の経験の少ない割れ目にとっては大きすぎるらしい。

それでも果穂は懸命に夫の動きにあわせて、腰をくねらせる。目は固く閉じられて、奥に突き入れるたびに、眉根が寄る。

そんな妻を愛おしいと思う。

唇を重ねて、その暖かな口に舌を差し入れながら、右手で胸のふくらみを揉み、先端の豆をつまむ。そうしながら、腰の動きを速くしていく。

「ああんっ……あなたっ……はんっ……やつ」

あくまでも控えめなあえぎ声。

愛する妻の声と、体の下で身悶える華奢な裸体に、たまらない興奮を覚える。その昂ぶりはすぐさま射精の欲求へと変わっていく。

「果穂っ……もう出そうだ……」

彼女の蜜穴が妖しく脈動し、甘美が亀頭から突き上げてくる。

「ああん……来て……あっ」

ラストスパートを始める。腰をさらに強く動かすと、快楽が全身に襲いかかってくる。射精感が込みあげ、そのまま彼は欲望に従った。

「ううっ……出るっ！」

尿道口から、悦びとともに精液が飛び出す。膣穴がきゅつと引き締まって竿を刺激し、白濁した液を絞り取っていく。

「あああっ……うっ……はんん」

のびやかな肢体が体の下でくねる。

何度も腰をひくつかせて、孝典は精を放った。

「あああん……」

体の奥底に夫の子胤をたつぷりと浴びた彼女は、脱力してベッドに横たわる。

孝典も射精後の倦怠感の中、一物を抜いてその横に仰向けに寝転がった。息が荒くなり、全身が汗だくだった。

「ふう……よかったよ、果穂……」

彼女も肩で息をしながら、上気した色っぽい顔を微笑ませた。

「……うん。赤ちゃんできると、いいね」

なかなか待望の子供は授からなかった。孝典はまだゆっくりでいいと思っていたが、果穂は早く子供が欲しいようだった。

「今日は、赤ちゃん、できやすい日？」

「うん」

妻がうなずく。

そのまま黒髪の頭を、彼の肩にことりと載せた。

セックスのあとの気だるさの中、二人は生まれたままの姿でまどろんだ。

2

翌日は家の荷物の整理をして過ごした。

二人揃ってくるくると働き、一日が終わる頃には、だいぶ目処がついてきていた。テレビなどの電化製品はひととおり使えるようになり、カーテンや大きな家具はす

べて定位置に収まった。

リビングのソファに夫婦揃って座り、一息ついた。妻が首からぶら下げたタオルで額の汗を拭い、ペットボトルのままミネラルウォーターをごくごくと飲んで、大きくため息をついた。

「ふう。疲れたね……」

「ああ。でもだいぶ片づいた」

「そうね。今日は、これくらいにしておきましょうか」

彼女は部屋を見渡して笑顔になる。

「俺も喉が、からからだ」

「はい」

果穂が飲み物を手渡してくる。

孝典は受け取り、同じようにラッパ飲みした。

「うまい。ほんとはビールを呑みたいところだけどさ」

「まだ、早いでしょ」

外は夕方の斜めの日差しに変わっていたが、まだ明るい。

彼女が背中を伸ばして腰をとんと叩く。Tシャツを着た胸を張ったので、形の

いい乳房が強調される。

「ご近所さんにも、挨拶に行っておいたほうが、いいよね」
「そうだねえ」

夫婦は揃ってリビングの窓から、道を隔てて建つ壮大な洋館を見る。

「特にあそこは、行っておきたいな」

「夕食までまだ時間あるし、挨拶にまわる？」

日暮れの赤みをおびた光に照らされて、古びた館はさらに哀愁に似たようなもので漂わせていた。

「なんか手土産とかさ、用意してるの？」

「うん。このあいだデパートで、買った」

「さすが奥さん、手まわしがいいねえ」

孝典が褒めると、果穂は「えへへ」と照れたように微笑んだ。

「じゃあ、行くか」

彼は膝を音を立てて叩くと、勢いよく立ち上がった。

「このままの格好じゃ、だめだよ……着替えなきゃ」

「そう？」

彼女があきれたように笑った。

「あたりまえじゃない」

いったん寝室に上がり、服を替える。孝典は白のポロシャツの上にジャケットを着て、薄茶色のコットンパンツをはいた。果穂は体にぴったりの白いTシャツに黒のカーディガンを羽織って、ラベンダー色の膝丈のフレアスカート。大きめにあいた丸首のTシャツの胸元から、ほんの少し谷間が覗いている。

「ちよつと、体のラインが出すぎかしら？」

肩までのボブカットの黒髪を揺らして、彼女がその場でターンする。

「いいさ。魅力的なおっぱいだよ」

手を伸ばし服の上から胸に手を当てて、少し力を入れた。やわらかな胸が、その指を押し返してくる。

体をよじってその手から逃れながら、妻は顔を少し赤くした。

「やだ。孝典のえっち」

それから二人揃って、玄関を出る。

まずは向こう三軒両隣、同じような建て売りの住宅へと挨拶に行った。

それぞれの家には住人がいて、にこやかに孝典たちを歓迎してくれた。子供がいる家庭が多かったが、年代もだいたい似通った夫婦ばかりのようだ。

「よかったね、よさそうな人ばかりで……」

果穂がささやく。

「ああ。そうだね」

そして、道の向こうに威風堂々とそびえる古い洋館を見た。

「あとは、あそこだけか……」

二人は二車線の道路を渡って、その大きな門の前に来る。鉄製の門は、ぴつたりと閉じられていた。

妻がきよろきよろとあたりを見まわす。

「なんか、緊張するね……あ、呼び鈴があった」

太い煉瓦造りの門柱に、これだけはやたらと新しいインターフォンがあった。上部にはカメラもついている。

「セキュリティには、気を使ってるってことか……」

孝典は独り言をいい、それから果穂を見た。

「じゃあ、押すよ」

「うん」

指を伸ばしてボタンを押す。ピンポーンという聞き慣れた音がして、しばらくしてから、スピーカーから声が聞こえた。

「どちら様？」

女性の声だ。向こうからはこちらが見えているはずだった。いきなり若い夫婦が呼び鈴を鳴らしたというのに、あまり驚いているふうはない。

横から妻が首を突き出すようにして、用件を告げた。

「あ、あの……わたしたち、先日、前の家に引っ越してきたものですけど……ご挨拶に寄せていただきました……」

「あら。それはわざわざ、どうも」

少しくぐもった女性の声が、そこで少し間を置いた。

「……門はあいてますから、入ってらっしゃい」

おそるおそる、その重厚な鉄製の門を押すと、予想に反して、軽くすべらかに開いていく。見た目は古く見えるが、ちゃんとメンテナンスされているということだろう。

向こうには、石畳の道がまっすぐに続いている。丸くきれいに形の整えられた低い灌木が、道の左右に配されて庭を区切り、その向こうには緑豊かな背の高い木々が茂つ

ている。

敷地の中へ足を踏み入れると、空気までが変わったようだった。目の前には、洋館が威圧的にそびえている。

そんな中を夫婦は歩いて行く。

果穂が手をつないできた。

「き、緊張してきたよ……」

その少し汗ばんだ手を握りかえしながら、孝典はきよろきよろとあたりを見まわした。

「やっぱり、すごいなあ」

二人は圧倒されていた。そのままそろそろと道を進み、大理石のひさしが大きく張り出したエントランスへ入る。ちょうどタイミングを見計らったように、その奥の二枚組の観音開きの木の玄関扉が、右側だけ内に開いた。

そこには黒の背広を身にまとった痩せた初老の男性が、背筋を伸ばして立っていた。シルバーグレーと黒のストライプのネクタイをしている。手には真っ白なシルクの手袋。オールバックにした白髪。その姿には一分の隙もない。

顔をゆつくりと動かして、エントランスのところで固まっている夫婦を見、四十五

度の角度でおじぎする。

「いらつしやいませ」

果穂が慌てて握っていた手を離す。そのまま二人は頭を下げた。

「あ、その……」

背広の男が、身を起こして再びまっすぐこちらを見る。その眼光は鋭いが、なんの感情も宿っていない。

「わたくしは当家に仕えております可藤と申します」

使用人ということか。たしかに男は、どこからどう見ても、執事という感じだった。現実の執事に会ったことは、今まで一度もなかったが。

「あ、こ、こんにちは。新井です。以後お見知りおきを……」

孝典はおろおろと、間抜けな挨拶を返す。

「奥様に上がっていただくようにと、仰せつかっております。こちらへどうぞ」

ドアを大きく開いて、身振りで中に入るように促す。

「お、おじやまします……」

彼らはおずおずと玄関に入った。

そこは二階までの吹き抜けの広々とした空間だった。豪華なシャンデリアが天井か

ら吊され、緋色の絨毯が敷かれている。ホールの奥には、ゆるやかなアールを描いて二階へ続く総大理石の階段。上部がアーチ状になった大きな窓から、西日が差しこんでいる。がらんとしたこの空間だけで、夫婦の新居がじゅうぶん収まってしまいうだろう。

二人は思わず立ち止まって、あたりを見まわす。果穂が小さな声でつぶやいた。

「わあ、すてき……」

いつのまにか、可藤が前に立っている。

「どうぞ、こちらへ。靴のままで結構です」

先頭に立って、奥へと歩き出す。

玄関ホールを抜けると、薄暗い廊下がまっすぐ続く。ところどころに曲線を描く意匠のランプが設置されていて、ぼんやりと橙色に光っていた。

入ってすぐのドアのところで、可藤は立ち止まった。

「こちらでございます」

まるでヨーロッパの古城のような重厚な木製の扉は、白く塗られていた。

白手袋の右手で軽くノックした彼は、真鍮製のドアノブをひねって、それをうやうやしくあけた。

「……どうぞ、お入りください」

中は八メートル四方くらいの大きな正方形の部屋だった。毛足の長いベージュの絨毯が敷かれている。奥の床までの格子窓から、木々茂る広い庭が見える。暮れなずむ太陽の光の中、今は闇に沈もうとしていた。

部屋の中央にはアールデコ調のローテーブルがあり、その前の一人掛けのソファに、女性が腰かけている。

彼女はこちらに顔を向けて、にこやかに微笑んだ。

おずおずと二人は中に進み、女性の前まで来ると、揃ってぺこりと頭を下げた。

ここは夫である自分が口を開いたほうがいいだろうと判断し、孝典はよそ行きの顔を作った。

「あ、あの、こんにちは。前の家に引っ越してきた新井です……どうぞ、よろしくお願いします」

「つ、妻の果穂です……はじめまして。よろしくお願いします」

緊張を隠せずに妻が言い、夫婦はまた頭を下げた。

女性は、微笑を保ったまま軽く会釈を返す。

「はじめまして。こちらこそ、よろしくね」

その声はインターフォンから流れてきた声だ。少しハスキーで鼻にかかった甘い声。年齢は三十代後半あたりだろうか。ダークブラウンのウェーブした髪は、頭の上で結い上げられている。ほつれ毛が数束、うなじから下へ垂れている。

そしてその下の顔は、はっとするほど美しい。透き通るような真っ白な肌、少し垂れ気味の大きな瞳に、こぶりの鼻。真っ赤なルージュの塗られた唇は肉厚で色っぽい。

その美しい顔が二人をじっと見て、それから正面のソファを手で示した。

「どうぞ。お座りになって」

彼女は真っ白なさらさらした生地のスリーブブラウスに、膝下までの長さの黒のタイトスカートを身にまとっていた。そこから突き出たふくらはぎは細く締まっていて、足元に黒いパンプスを履いている。

襟許のおおきく開いたブラウスにつつまれた巨乳。そのくつきりとした胸の谷間を見ないように必死に自制しながら、孝典は対面のソファに座った。隣に果穂もおおずおと座る。

すかさずドアがあいて、執事の可藤が銀色のトレイにティーカップを二客載せて、運んできた。うやうやしくそれぞれの前に置く。マイセンとおぼしき磁器のカップから、紅茶のいい香りが漂ってくる。



「どうぞ。お飲みになつて」

夫人に促されて、二人は口をつけた。

妻が感動したように言う。

「おいしいです……」

真つ赤な唇の端を上げて、妖艶に彼女が微笑んだ。

「気に入った？　ダージリンのセカンドフラッシュよ」

それから、少し目を見開いて、続けた。

「あら。自己紹介がまだだったわね。兎玉千恵子です。家族は夫の邦彦と、娘の満里

奈との三人。どうぞよろしくね」

果穂がぺこりと頭を下げる。

「はい。よろしく願います」

孝典はカップを手に、あらためて豪勢な部屋を見渡した。

「それにしても、すばらしい洋館ですね。いつ頃建てられたものですか？」

「明治中頃と聞いてるわ……まあ住んでるものにとつたら、広いだけで不便だけれど

……」

器をソーサーに戻すと、かちやりと音がする。顔を上げると千恵子と目があう。そ

の瞳は吸いこまれそうなほど魅力的だった。それを誤魔化すように彼は慌ててもごもごと口の中でつぶやいた。

「はあ……そんな、ものですか……」

「そうよ。娘の満里奈なんて、今あなたがたが住んでいるお家、あんなところに住みたいって、よく言ってるわ」

千恵子がテーブルの上で少し身を乗り出してくる。紅茶の香りとは異なる甘い匂いが漂う。彼女のコロンの匂いだった。よく見れば、たつぷりと前にドレープが入ったブラウスを着ているのに、その下から突き出す巨大な胸のふくらみがはつきりとわかった。孝典はそこをじっと見ないように、必死に自制した。

それを知ってか知らずか、千恵子が微笑む。

「お二人は、結婚してどれくらい？」

果穂が答える。

「まだ、一年とちよつと、なんです」

「あら。まだ新婚さんね」

「いええ。そんなこと、ないですけど……」

なぜか顔を赤くして妻が照れる。そんな彼女を、千恵子はじつと潤んだ目で見つめ

ている。

「ご近所さんですし、また今後ともよろしくね」

果穂がいきおいこんで、座ったまま頭を下げた。

「はい。わたしたちのほうこそ、よろしくお願いしますっ」

この洋館のことや近所のことをしばらく話したあと、そろそろ辞去する頃合いだと判断した孝典は紅茶を飲み干し、腰を浮かせておじぎをする。

「ごちそうさまでした。そろそろ……」

「あら。お引き留めしてしまったかしら」

妻が慌てたように首を振る。

「いえ。そんなことはないです。楽しかったです」

「そう。また今度、ゆつくりと遊びにきてちようだい……」

「はい。ぜひ……」

応接間のドアをあけ外に出た瞬間、どこからともなく可藤があらわれて、二人を玄関まで案内した。

彼の皺ひとつなくプレスされた黒のジャケットの背中を眺めながら、孝典たちは廊下を歩く。ちょうどホールまでやってきたとき、玄関の扉があいて、少女が中に入っ

てきた。

背中までのストレートの黒髪の下の化粧気のまったくない顔は、透きとおるように白く、はっとするほど清楚で美しい。ピンクのリボンタイをした白のブラウスの上に、紺色のスクールカーディガンを着て、下は紺色の膝上丈のプリーツスカートという学校の制服を身にまといていた。

「あら」

玄関のところで夫婦を見つめて、睫毛の長い大きな目を見張った。

可藤がうやうやしくお辞儀をする。

「お嬢様。お帰りなさいませ」

そして白い手袋をはめた手で、孝典たちを上品に示して、紹介した。

「こちらは新井様ご夫妻でいらっしやいます。引越しのご挨拶に来られました」

「そうなの」

そっけなく可藤にうなずくと、美少女は二人を交互に見た。

孝典はその可憐な姿に見とれてしまつて声も出ない。

慌てたように果穂が、ぺこりと頭を下げる。

「あの、新井です。ちょうど斜め前に引越してきたの。どうぞよろしくお願いしま



す」

我に返った彼も続けた。

「新井孝典です。はじめまして」

少女はそんな夫婦を見て、花が咲いたように笑った。

「こんにちは。はじめまして。満里奈と申します。わたしのほうこそ、よろしく願いますわ」

満里奈が頭を下げると、艶やかな黒髪がさらさらと揺れた。

「では」

そう告げると、彼女は洋館の奥へと消えた。

孝典たちはそのまま可藤に見送られて玄関を出る。慇懃に一礼する執事に unnecessary ほどぺこぺことお辞儀を返した夫婦は、門扉をあけて外に出た時、思わず揃ってため息を漏らした。

「ふうう。緊張したなあ」

果穂がこちらを見上げてうなずく。

「ほんと。でも素敵なおうちだったなあ……それに二人とも、すごい美人だったね」
豊満で色気のある夫人と、スレンダーで清楚な娘とでタイプは違うが、たしかに美

しかった。

孝典の脳裏にさきほどの二人の顔が浮かぶ。顔がにやけていないか、それを妻に見破られていないか、彼はひやひやした。

その横を歩きながら、夢見る瞳で果穂が言う。

「あんなお家に、住んでみたいなあ」

その時、妻が手土産の袋をまだ手に提げていることに、孝典は気づいた。

「あ。果穂。それ」

彼女は自分の手を見下ろし、かわいらしく顔をしかめた。

「あん。忘れてたっ」

「またベルを鳴らすのも格好悪いし、またあらためて持っていておいてくれよ」

「そうね」

二人は並んで道を渡り、自分たちの新居へと帰り着く。

朝から慣れない肉体労働をし、挨拶に行つて気までつかつて、もうくたくただった。手早く妻が作った夕食を食べ、ひと風呂浴びたら、すぐに眠ってしまった。

3

二人が新居に引っ越して二週間。

ようやく新しい生活にも慣れてきた。

仕事があつたのであまり手伝うことはできなかったが、帰るたびに家の中は整理され、過ごしやすくなっていた。夫婦の愛の巢ができあがっていくことに、浮き立つような歓びと安心を感じる。

今日は日曜日。会社が休みの孝典も、果穂のできなかったA・V機器の配線や高いところでの作業を、言われるがままに手伝った。

ひととおり終わると、もう夕方だった。妻の手料理を食べて、ビール缶を片手に彼はリビングのソファに座っている。目の前には液晶テレビ。リモコンを手にしてただらとチャンネルを変えながら、ぼんやり画面を眺めていた。

その横には新婚旅行に行ったバリ島の写真が、額に入れて飾られている。夕暮れのビーチで寄り添う二人が、幸せそうに笑っている。

「おつかれさま」

洗いものを終えた果穂が、笑顔で横に座る。孝典は手を伸ばして、その魅力的な細い腰に手をまわして、引き寄せた。

「あんっ」

やわらかな体がしなだれかかってくる。甘いい匂いがただよってくる。

頭を夫の胸にもたれかからせたまま、彼女が言う。

「お向かいの児玉さん……洋館の。このあいだ渡すの忘れてたお土産、持っていたわ。奥様、またいつでも遊びに来てくださって」

「ああ。すごい家だったなあ」

「このあいだは、ひととおりのお屋敷の中を、案内してくださったのよ」
そのことを思い出したのか、果穂はふんわりと微笑んだ。

「すごかったなあ。あんな素敵な家に住めたら、楽しいだろうね……」

「まあな。でも実際に住むとなると、維持費とか掃除とか、大変だろうけどね」
「そうね」

孝典はうなずく妻の腰にまわした手を、さらに引き寄せた。そのまま太ももを持って、こちら向けに膝の上に抱き上げる。

「きゃ」

彼女がソファの上で孝典の腰にまたがり、両手を彼の肩の上に置く。孝典がささやく。

「でもこの家だって、じゅうぶん素敵だろ」

妻が微笑みながら、うなずいた。

そのまま二人は口づけを交わす。暖かなやわらかい舌が孝典の口の中にそつと入ってきて、なまめかしく動きまわる。

自分のものが、大きくなってくるのを感じる。そこはカーキ色のパンツにつつまれた妻の股間に当たっている。

「あん。大きくなってきた……えっちね」

彼女の手が、ズボンの上から、硬く尖ったものを撫でる。

それから、あらためて気づいたように、体を起こした。

「あつ……お向かいの二階から、この家、丸見えなのよ。このままだと、見えちゃう」
つられて孝典は洋館を眺める。上部がアーチになった重厚な窓には灯りがついていて、一階ぶんの高さが違うのだろう、こちらからは見上げる格好になって、天井の一部しか目にできない。たしかに向こうからだ、よくこちらが見えそうだ。

彼女は立ち上がり、ベランダに面した茶色のカーテンを閉めた。

再びソファのほうに戻ってきた妻を前に立たせて、孝典はそのやわらかな胸に抱きついた。

「やんっ」

谷間に顔をうずめると、かすかに身をよじって抵抗した。

甘いい香りが漂ってくる。

果穂の匂いだ。

そのまま孝典は、ダークブラウンのTシャツを脱がせ、下からあらわれたベージュのブラジャーのホックを外す。新居の明るいリビングルームに、ふたつの白い丘がさらけだされた。その先の桃色の突起は、まだ半ば乳肉に埋もれている。

「やだ。こんな明るいところで、恥ずかしいじゃない」

彼女が自分の胸を片手でおおう。

あれだけ互いに秘所をさらけだして愛しあっておいて、恥ずかしいものにもないじゃないかといつも思うのだが、妻は違うようだった。

なおもその手をのけて乳房にしゃぶりつこうとする夫から、すばやく身を引いて逃げた。

「待っててば」

ふくらみを隠したままスイッチのところまで歩いて行き、オフにする。薄暗くなったりビングに、キッチンの青白い照明だけがカウンターの向こうから漏れている。

みたび孝典の前に立った妻はようやく胸から手を離して、前に座る夫の口元にみずから乳首を差し出した。

夢中でその小さな蕾を吸う。口の中で舌先で転がすように愛撫していくと、しこつた肉の豆が中から固く突き出てくる。

「ああんっ……」

彼女はかすかなあえぎ声を漏らして、さらに乳房を押しつけてくる。

孝典はちゅうちゅうと音を立てて、さらに強くそこを吸った。

「はああんっ……」

控えめで戸惑うようなあえぎ声。

乳首を交互に吸いながら、七分丈のパンツを脱がせていく。細いパンツを無理矢理下にくらし、そのまま一緒に小さなショーツも取り去ってしまう。

「あんっ……んんっ」

生まれたままの姿になった妻の美肌を撫でまわし、舐めまわしながら、座ったまま

でみずからも服を脱いでいく。

薄暗い部屋の中で、彼女のすべらかな裸体が白く光っているようだ。股間の繁みに手を当てて、そつと奥へと指を進めると、そこはもう熱く潤っていた。はみ出した小陰唇のあいだへと指を突き入れると、ぬめぬめと襷が動いて孝典を咥えこんだ。

「あーん。だめええっ」

細くくびれた腰が前後にくねり、頭を抱く手に力が入る。

「果穂っ」

股間の長大なものは、天井を向いて硬く屹立し、先ほどからぴくぴくと震えている。もうがまんができなかった。

彼は両手で妻の腰を引き寄せる。

「あああんっ」

少し上気した顔で、果穂が腰をくねらせる。

座ったまま対面で、二人は繋がった。

腰を下からゆっくりと使い出したら、彼女の白い背中が弓なりに反った。

「あああんっ……はんっ……はうんっ……あああっ……」

抑えた妻のあえぎ声を聞きながら、孝典は徐々に腰の動きを速くしていった。



だが夫の肩に顎を載せて貫かれ悶えながら、果穂がじつと冷めた目でカーテンのほうを見つめていることに、孝典は気づかない。

彼女は口では甘い声を洩らしながら、その視線を逸らさない。

「あああつ……あはああんっ」

その整った顔が歪む。

若妻の目線の先には、カーテンの隙間に覗く、灯りのついた洋館の窓があつた。

また会社と家を往復する日々が始まった。翌週になると、大規模な案件を抱えた孝典は急に多忙になり、毎日の帰りが遅くなった。土日も出勤しなければならないほどの忙しさだった。

果穂は毎日、日付が変わる頃に帰ってくる夫を、変わらない笑顔で迎えてくれる。そのことに、彼は幸せを感じていた。

そしてその翌週の金曜日。なんとか休みが取れて、明日からは二連休だった。やっとゆっくりできる。孝典はくたびれていた。帰りが遅いので、すっかり妻との夜の営みもごぶさただった。

その日も家に帰り着いたのは深夜十二時近くだった。風呂に入りビールで晩酌をし

た彼は、夫婦のベッドに入ると、さっそく果穂におおいかぶさっていった。

「果穂」

だが、彼女は顔をそむけて、首を振った。

「ご、ごめんなさい……その、気分が……すぐれなくて。今日は、勘弁して……」
膨れあがった欲望が、穴の空いた風船のように急速にしぼんでいく。

「……そ、そうか。だいじょうぶ？」

なるべくやさしくそう言った孝典だったが、妻の体を求めていったときに見せた顔つきに、かすかな違和感を覚えていた。

ほんの一瞬だった。

顔をそむけた瞬間、彼女が眉をしかめて、本当に嫌そうな面持ちをしたような気がしたのだ。妻の端正な美貌の裏側から、そんな醜い表情がにやりと這い出てきたような……。

彼はぞくりと背筋が寒くなり、戸惑う。今の顔はいったいなんだったのか。胸の中に、どす黒い疑惑が芽生えはじめる。

すぐさまその表情は彼女からかき消え、あいまいに笑って夫にうなずいた。

「ええ……なんでもないと、思うんだけど……最近、わたしも忙しかったから、疲れ

たんだと思う」

「そうだよな。家のこと、なににもできなくて、ごめんな」

そう言う彼に、やっと果穂は心から微笑んでくれた。

「ううん。孝典は外でがんばってるんだから。お家のことは、まかせておいて……」
だがこのかすかに感じた違和感は、胸の中から消えなかった。それは埋み火のように翌日になっても残って、やがて燃えさかる日を待っているかのようなだった。

翌日から二日間、久しぶりに新居で一人きりで過ごして、金曜の夜に感じた感覚は、だんだんと孝典の胸から消えていった。

いつもの魅力的な笑顔。夫に対する言葉も態度も、まったく以前と変わることがなかった。

あの表情は気のせいだったのだ。思い過ごした。

自分でもそう信じかけていた時だった。日曜の夕方、たまたま、向かいの洋館の話になった。なんでもない、たんなる世間話のつもりで出した話題に、妻の顔色がかすかに変わったような感じがしたのだ。

「ん？　どうした？」

つい彼は果穂に尋ねてしまう。ずっと彼女は夫から目を逸らした。その目が、狼狽に揺れていたような気が、孝典にはした。

一瞬後、妻は笑顔を取り戻す。それはいつもと変わらない笑顔だ。

「ううん。なんでもないの……なんの話だっけ」

「いや。別にどうでもいいんだけど。お向かいの児玉家。いったいなにをやってるんだろうなあって、思っただけ」

妻が「あはは」と声を出して笑う。

「ごめんごめん。ちよつとぼんやりしちゃって。児玉さんのところ、会社もをいくつか経営されてるそうよ」

「ふうん。やっぱ、金持ちだなあ……」

再び芽生えだした黒い気持ちを必死に取り繕って、孝典は平静を装う。相手も同じように、本当のことを隠しているような気がしてならなかった。

だが、いくら彼女の目を見つめても、そんな感情は読み取れない。

「そうね。わたしもまだご主人には、お会いしたことないんだけど……」

「ん？ あ、あの洋館に、行ってるのか？」

胸の奥の奥がなんだがざわざわとする。

孝典はその理由もわからない不安を打ち消すように、明るく笑った。妻も微笑みながら、うなずく。

「うん。たまに奥様が呼んでくださるのよ。何度かおじやましたわ」「ふうん」

近所づきあいをすることは、大切だ。そう思いながらも、なにかおもしろくない気持ちしがしてしかたがなかった。

あの妖艶で豊満な館の夫人の姿を、思い浮かべる。

だが話題はそれ以上広がらず、夫婦は新居に買い足さなければならぬものについて、話し始めた。なんとか笑顔で妻と会話しながら、彼の内心に再び芽生えた小さな黒い感情は、いつまでも心の底にとどまっていた。

翌日から、また忙しい日々が始まった。

覚えた違和感も、仕事にまぎれてあまり感じないようになった。

夜遅く帰宅する夫を、きちんと起きて笑顔で出迎えてくれる果穂の姿は、彼の理想の妻そのものだった。

気のせいだと思いたかった。

このまま新居での生活をつつがなく続けていきたかった。
だが、その孝典の願いは、かなえられることはない。

次の金曜日のことだった。

たまたまその日は、手伝いに出ていた現場が夕方に終わった。職場には直帰すると
言ってあったので、時間が空いてしまった。一度会社に戻って、たまった仕事をかた
づけてしまおうかとも思ったが、それも面倒だった。

家に帰るか。

孝典はそう思い、妻の携帯に電話を入れる。

電源が入っていないか、電波の届かない場所にいる。そんなメッセージがスマート
フォンから流れてくる。なんの疑惑も持たず、彼は電車に乗って、家へと戻っていく。
日が暮れ始め急速に暗くなっていく四月始めの空の下、孝典は洋館の前の道を通り
過ぎ、自宅の鍵を開けて中に入った。

「ただいま」

薄暗い玄関で中に声をかける。

返事はない。

細く急な階段を登りリビングダイニングを覗くが、照明は落とされ誰もいない。三階の寝室へと続く階段の下から、彼は声をかけた。

「ただいまー。果穂？　いないのか？」

ネクタイを緩めながら、さらに階段を上がり、寝室のドアをあける。

中は真っ暗だ。

果穂のやつ、どこにいったんだ？

孝典は今朝の夫婦の会話を思い出す。

どこかへ出かけるとは、言っていなかったはずだ。

ちよつと買い物に出ているだけだろう。

そう思いながらも、彼の胸騒ぎは止まらない。

寝室の電気もつけずにダブルベッドに歩み寄り、ジャケットを脱いでベッドの上に置き、ネクタイを襟から抜く。カッターシャツの第一ボタンを外して、孝典は懸念を振り払うように大きく伸びをした。

「うーん」

だが胸の中の違和感は、さらに大きくなるだけだった。

そのままマットレスの上に座り、もう一度、果穂に電話をかけてみる。

結果は同じ。

彼は大きくため息をつき、それからふと外を見る。

すっかり日は暮れて、あたりは闇に沈んでいた。

道の向こうに、兎玉家の洋館が見える。緑の葉の生い茂った大きな木のあいだに、上部がアーチ状になった二階の窓が並んでいる。ほとんどは白い鎧戸が閉まっていたが、いちばん右端だけがあいていて、そこから灯りが漏れていた。

そこに、動く人影があった。

「ん？」

思わずひとりでそう声に出してしまう。立ち上がった孝典は、暗い部屋の中を、ベランダに面した掃き出し窓に近づいていった。

それは、第六感が反応したとしか、言いようがなかった。

じつと洋館を見つめる。いちばん角の窓なので、部屋の中がどうなっているのかは窥えない。ただ向こう側のクリーム色の壁だけが見えていた。その窓際に、逆光で黒いシルエットだけになった人物が立っている。

彼はごくりと唾を飲みこんだ。

その人影はじつとこちらのほうを見ているような気がするが、人相などはわからな

い。

しかし、体のラインから見て女性だ。

あれは……果穂ではないのか。

そんな疑念が孝典の頭をよぎり、心臓がどきりと高鳴る。

影絵のように真っ黒なその形が、見慣れた愛妻のものに見えてしかたがなかった。

目を細めて、必死で彼は見極めようとする。

実際にはわずかな時間だったが、ずいぶん長い間、暗い寝室からその影を眺めていたような気がしていた。

その時。

洋館とを隔てる道を、一台の車が通り過ぎていく。

一瞬、窓際のシルエットにヘッドライトから漏れた光が当たり、明るくなった。

孝典は大きく目を見開いたまま、息を飲む。

やはり果穂だった。

しかも……。頭が混乱して、どうしていいかわからない。今、一瞬見えた彼女の姿を受け入れるのを、脳が拒否していた。

ひゅつと音を立てて、彼は鋭く息を吸いこんだ。



だが確かに見た。

妻は、裸だった。むきだしになった一つの白い乳房と、その頂きにある赤い蕾がはつきりとわかった。その顔は、桃色に上気しているように見えた。

そんな顔でじつとこちらを、二人の新居を見つめていた。その目は、興奮と哀しみに満ちていたように、孝典には思えた。

「いったい、どういうことだ？」

独り言が出てしまう。

それを合図にしたかのように、彼女は横を向いた。

その目線が、孝典には見えない部屋の中の誰かを見つめている。

孝典は混乱していた。

なぜ果穂が、あんなところに……。

彼がベッドで抱こうとしたときに、一瞬見せた嫌悪の表情。洋館の話が出たときの刹那の狼狽。そんな顔が、頭の中でぐるぐるとまわって、それが今見たばかりの白い裸の姿に溶けあっていく。

「くそっ」

吐き捨てるようにそう言い、拳を握りしめた。

果穂に秘密があるのは間違いない。

それは、あの洋館でのことだ。

長くラグビーをやってきた孝典は、あれこれ考えるよりも、ともかく行動に移すという性格だった。

あそこへ行ってみよう。

彼は決意する。

第二章 女たちの秘め事

1

孝典は家を飛び出し、そのまま駆け足で道を横断して洋館の前に辿り着いた。

鑄鉄の唐草模様の門はぴったりと閉じられている。

しばらく逡巡したあと、意を決して、彼は震える手でインターフォンの丸いボタンを押した。

闇の中にチャイムが響く。

しばらく待ってみたが、まったく反応はなかった。ただ無機質なカメラのレンズが、こちらを見返しているばかりだ。

もう一度、鳴らす。

今度は少し間があつて、玄関のドアがゆっくりと開いた。中の灯りが漏れて、エン
トランスが明るくなる。人影が出てきて、滑るようにこちらにやってきた。

執事の可藤だ。あいかわらずフォーマルな背広を隙無く着こなしている。
門の向こう、鉄棒の並ぶあいだから慇懃に一礼し、声をかけてきた。

「これは新井様。どんなご用件でしょうか？」

孝典は勢いこんで尋ねる。

「つ、妻が、こちらに来てませんか？」

彼はあくまで無表情に、首を振った。

「いいえ。お見えではありませんが」

頭に血が登り、思わず声を荒げてしまう。

「なんだって……二階に果穂がいるのを、俺は見たんだった！ いるはずだった！」

そんな孝典の勢いにまったく動じずに、淡々と彼が続けた。

「いえ。いらつしやつておりません」

「そ、そんなつ……おかしいよ……それなら、ここの家の人を誰か出してくれっ」

また可藤は深く頭を下げる。

「申し訳ございません……旦那様は出ておりまして、千恵子奥様はもうお休みになつ

ておられます」

「そんなこと言ったって、俺は見たんだっ！」

思わず門の鑄鉄の棒を両手で握りしめていた。しかし力をかけても、それはびくともしない。

「そういうことです。どうかお引き取りください……では」

また執事が慇懃に礼をする。

取りつく島もなかった。

「たのむ。中に入れてくれ！」

そんな懇願を無視して、男がきびすを返す。

その時、門の横の暗がりから、若い女性の声が響く。

「待ちなさい」

ぴたりと足を止める可藤。

闇からあらわれたのは、満里奈だった。最初に出会ったときと同じように、高校の制服を着ている。艶やかな黒髪が、夜の中でも輝いているようだった。その大きく可憐な目で、門扉をつかむ孝典をじっと見つめる。

「新井さん……でしたわね。たしかにあなたの奥様は、うちにいらっしやいますわ」

そう言った満里奈に、執事が咎めるような声を出す。

「お嬢様、それは……」

「いいの、可藤。お母様もわかっていらっしやることよ」

高飛車に彼女が告げると、可藤は一礼して引き下がった。

再びつぶらな瞳がこちらを向く。

「新井さん。奥様がどうなさっているか、本当に見てみたい？」

喉がからからに渴いている。このまま逃げ出したくなる。だが、そういうわけにはいかなかった。妻がどうしているか、なんとしてでも知らなくてはいけない。

孝典は大きくうなずいた。

目を光らせて制服姿の少女が微笑む。

「ちょうどいいわ。今日はお父様もいらっしやらないから。ついてらっしやい」

満里奈がくるりと回れ右をし、玄関のほうへ歩いて行く。制服の紺の襷スカートが揺れて太ももが一瞬見え、黒髪がふわりと広がった。

音もなく、鉄の門扉が開いた。

吹き抜けのホールに入ると、少女が振り返った。その透きとおるような白い顔は、

どきりとするほど美しかった。

「新井さん。なにがあっても、なにを見ても、騒いだりしないって約束してくださいませんか？」

「……ああ。わかった。約束するよ」

いったいこの先に、なにがあるのか。果穂が、なにをしているのか。わからないままに約束させられていた。

彼女は清楚な顔を微笑ませてかすかにうなずき、二階へと進んでいく。

階段を登る紺のスクールカーデイガンの背中を見ながら、孝典はうしろをついていった。歩きたびに制服のスカートがまくれ上がり、白い裏ももがちらちらと見えて、見上げる彼はどきりとする。ときおりシャンプーの甘い匂いが漂ってきて、鼻腔をくすぐった。

可藤が背後に音もなく従っている。その顔はまったく無表情で、なにを考えているのかまったくわからなかった。

二階へ着くと、分厚い絨毯の敷かれた廊下を右手へと進む。そしてなんの変哲もない濃い茶色の木のドアの前で、満里奈は立ち止まった。

ドアノブは丸い真鍮製で、ぴかぴかに磨かれて金色に光っている。

そのノブを細く白い指が握り、ドアをあけた。

「どうぞ。お入りになって」

孝典はおずおずと部屋に入る。中は狭く、薄暗い。この館には不釣り合いな、なんの装飾もない武骨な木の椅子が二脚、壁に向かって並んで置いてある。背もたれも座面も木のままで、使いこまれて飴色に光っていた。

壁には、高さ一メートル、横二メートルほどの長方形に、カーテンがかかっている。分厚いベルベットの真っ黒なものだ。

緊張が高まる。

冷や汗が脇を伝う。

あの覆いの向こうに、見てはならないものがある。それだけは、はつきりとわかった。

満里奈が入口に立つ執事のほうを見る。

「あなたは外で控えていて」

「かしこまりました」

礼をする可藤の前で、彼女がドアを閉めた。

廊下の照明が途切れて、さらに室内が暗くなる。その中で、じつとその大きな瞳を

光らせて、少女がこちらを見ている。

その沈黙に、孝典はがまんでできない。

「どうということなんです？　いったいここは……」

制服姿の華奢な体が近づき、人差し指を伸ばして孝典の唇にそつと当てた。電流のようなものがそこから流れたように感じて、彼は身をこわばらせた。

満里奈はまたその桃色の艶やかな唇の端を、きゅつと上げて微笑む。

「そんなに焦らないで。新井さんの奥様を、ご覧に入れますわ……」
すつと体が離れる。

白いブラウスにピンクの柄のリボンを付け、紺色のカーデイガンを着た可憐な姿で、美少女はゆっくりと奥の壁へと歩いて行った。プリーツスカートから伸びたきれいな形の脚には、同じく紺のハイソックスに茶色のローファーを履いている。

壁際の分厚いカーテンまで進み、たつぷりと間を取ってから、一気にそのベルベットの布を左右にひらいた。

孝典の目が、そこに釘づけになる。

少女が全体が見えるように、脇に退いた。

「ご覧なさい、新井さん……ちようど、よいところよ」

うつとりした口調でささやく。

あけられたカーテンの向こうは、一枚のガラスだった。

その奥には、白い灯りの溢れる洋室が広がっている。そのあまりの明暗差に彼は目をしばたたかせた。

しばらくすると目が慣れ、窓の向こうの景色が見えてくる。正面に、巨大な天蓋付きのベッドが置かれている。

その上では……。

孝典は信じられない光景を見た驚愕に、眼を見開いた。

心臓が胸から飛び出すのではないかと思うほど激しく動悸し、殴られたような衝撃で足がふらついた。

思わず木の椅子の背もたれを両手で握りしめる。

「な、なんだと……いったい……どうなってるんだ？」

口からかすれたつぶやきが漏れる。

真っ白なシーツのベッドの上では、二人の女性が、全裸で座ったまま向かいあわせに抱きあっていた。

それは果穂と、それからとなり立つ美少女の母、千恵子だった。

一瞬、彼にはなにが起こっているのか、理解ができなかった。いや、理解することを頭が拒んでいた。

妻が生まれたままの姿で、大きく脚をひらいて、千恵子の膝の上に乗っている。白い両手が相手の首にまわされ、しがみつくようにして、大きくみずから腰を動かしている。その顔は赤く上気し、きつく目を閉じて眉根を寄せている。

肩までの黒髪と、大きくウェーブした栗色の髪が、激しい動きに振り乱れる。

その二人のぴったりとくつついた股間を、孝典は吸い寄せられるように凝視する。妻の脚の付け根に、黒い棒状のものが出入りしているのがわかる。それは、千恵子から生えていた。黒革のベルトを腰に巻きつけて、作り物のペニスを装着しているのだ。そして、そのデイルドで彼女を貫いていた。

果穂の顔が、快樂でゆがむ。

口を大きくあけて、なにやら叫んでいるが、音はなににも聞こえてこない。椅子の背もたれを握りしめた手に力が入り、静脈が浮かび上がる。

「いったい、どういうことだっ！」

思わず大声を出した孝典に、あくまでも平静に満里奈が言う。

「あら、おじさま。大きな声を出さないでって言ったはずでしょ。まあいくら声を張



り上げても、ここの防音は完璧なので聞こえないけれど」

制服姿の少女が近づいてきて、ふらつく彼を支え、椅子に導いた。

「落ち着いてください。どうぞ、お座りになって」

満里奈に促されるままに、木の椅子に座る。まさにその椅子は、こうやって座って覗きを楽しむために置かれたものだった。

おそらくマジックミラーなのだろう、ガラスの窓の向こうでは、女同士の淫靡な絡みあいが続いている。

その豊満な体を蠢かせて、千恵子がしゃくり上げるように腰を使う。たつぷりと突きだした巨乳がやわらかそうに揺れ、それよりは小振りの果穂の乳房と重なりあい、変形している。

さらに二人の腰の動きがシンクロし、激しく早くなっていく。

千恵子の両手が妻の引き締まった腰を支え、導くように前後に動かしている。

〈続きは本編でお楽しみください〉